

在学生の英語力実態調査および提言

大 園 弘

本稿の構成

- I. はじめに
- II. 調査の目的
- III. 平成12年調査の結果と成果(振り返り)
 - (1)調査対象者
 - (2)調査内容
 - (3)調査結果(概観)
 - (4)調査の成果
 - ア)
 - イ)
- IV. 平成30年調査の結果と考察
 - (1)調査対象者
 - (2)調査内容
 - (3)調査結果の考察
 - ア)調査結果(文法編)
 - イ)調査結果(単語編)
- V. 提言
- VI. おわりに
- 資料(補遺)
- 注
- 謝辞

I. はじめに

平成12年(2000年)4月、筆者は九州国際大学の学生100名に英語力実態調査をおこなった。1980年から日本の学校教育に段階的に導入された「ゆとり教育」の負の影響の一つとして「学力低下問題」が議論されはじめ、大学教育においても理工系の大学や学部の一部で予備校講師や高校教師経験者に高校レベルの数学や物理の「補習(出前)授業」を依頼する対策が講じられるなど、多かれ少なかれ、どの大学も何らかの対応を迫られはじめた頃の調査であった。⁽¹⁾

無論、本学の英語関連科目を担当してきた筆者にも学生の英語力低下問題は深刻であった。たとえば、その年(平成12年)の入試(A日程)では、経済学部経済学科昼間主コース受験者全員の英語の平均点は34.55点、同夜間主コース29.20点、経営学科を含む経済学部全体では、40.72点という平均点が報告されていた。解答形式は四者択一形式なので、漏れなくマークしさえすれば、理論上、25%の確率で正答できる計算となること、また、実際に入学した学生の入試時における英語の平均点が上記の平均点を下回るであろうことを考えると、本学在学生の英語力低下問題は、当時、本学がかかえる最重要課題の一つであるとの認識が筆者にはあった。

幸い、当時は、学内で英語教育見直しの気運が高まりつつあった。平成12年度から「再開」された英語の「能力別クラス編成」は上記の流れから打ち出された教育内容改善の具体策であった。しかし、筆者には更に抜本的な改善策の必要性が感じられたのも事実であった。そこで、いかなる抜本的対策を講じうるか进行考察する目的で、上記のとおり、在学生の英語力実態調査をおこない、本稿第Ⅲ節(「平成12年調査の結果と成果(振り返り)」)に記したとおりの知見を得た。⁽²⁾

しかしその後、18歳人口の減少(「2018年問題」)が次第に深刻さと現実味を増していくなか⁽³⁾、本学は「生き残り政策」として、平成17年(2005年)、国際商学部を国際関係学部へと改組し、平成29年(2017年)には経済学部と国際関

係学部を現代ビジネス学部1学部に編みかえた。それに伴い、本学へ入学してくる学生の質と数にも自ずと変化が生じてきたという印象は否めない。すなわち、筆者が18年前に実施した英語力実態調査のデータはもはやその価値を有してはいない。

Ⅱ．調査の目的

この度、再度、本学在学生の英語力実態調査をおこなった背景は上記のとおりである。本調査の目的は次の三点である。

第一に、本学の英語教育に携わっているからには、筆者自身、学生の英語力の実態を少しでも客観的かつ具体的に把握しておく必要があるためである。筆者ら英語教育に携わる者は、日頃から授業をとおして、学生たちの英語力の実態を「なんとなく」理解しているつもりでいる。しかし、「なんとなく」理解しているだけでは教育の改善には繋がらない。そこで、在学生の英語力の実態を調査する必要が生じるのである。

第二に、本学の英語教育、とりわけ、初年次に英語の基礎力を身につけさせることをねらいとして開講されている必修科目の「英語Ⅰ」・「英語Ⅱ」を本来の目標どおりに機能させるためには、テキストの選定など科目担当者間で議論すべき問題が数多く存在するはずであるが、そうした議論を促進していくためにも在学生の英語力実態調査は基礎データとして必要不可欠だからである。筆者が前回調査をおこなった18年前と現在では、これらの科目を担当する教員の構成が大きく変わっており、専任の英語教員に限ってみても、約半数ほどが入れ替わっている。すなわち、キャリアの長い教員とそうでない教員との間には多少なりとも「英語Ⅰ」・「英語Ⅱ」に対する認識の差があり、その差を縮め、本学入学者により良い教育内容を提供するためには、まずは担当者間での議論が必要になるし、そのためには上述のとおり、在学生の英語力実態調査は基礎データとして必要不可欠となる。

第三に、筆者がイメージしている「英語Ⅰ」での教育内容および教育方法を提言したいからである。そのためには提言の根拠として在学生の英語力実態調査の基礎データが欠かせない。

Ⅲ．平成12年調査の結果と成果(振り返り)

(1)調査対象者

平成12年調査の調査対象者100名の所属・学年・人数・調査実施日・時限の内訳は以下のとおりである。

◇経済学部経済学科昼間主コース2年次生38名(4月13日4時間目調査実施)

◇経済学部経営学科昼間主コース1年次生12名(4月18日1時間目調査実施)

※筆者担当の「入門演習」登録者

◇法学部法律学科昼間主コース2年次生32名(4月17日4時間目調査実施)

◇経済学部経営学科夜間主コース1年次生14名(4月19日6時間目調査実施)

◇法学部法律学科夜間主コース2年次生4名(4月19日7時間目調査実施)

(2)調査内容

調査では中学校卒業レベルの英語力を文法・単語の綴りの両面から測るものとした。文法については、文型・不定詞・現在完了形・受動態・関係代名詞など中学校指導要領、第2章第9節(外国語)⁽⁴⁾に必須項目として挙げられているもの、単語についても同要領に必須語として指定されたものを取りあげた。調査用紙は資料(補遺)として本稿末尾に掲げている。参照されたい。

(3)調査結果(概観)

文法・単語の綴りともに調査事項(設問)の正答率は、本稿第Ⅳ節、「平成30年調査の結果と考察」(3)「調査結果の考察」ア)文法編 イ)単語編のとおりである。同節に掲げた調査事項(設問)の正答率の最後の括弧内に示している数値

が、当時の調査結果である。文法・単語の綴りともに、総じて正答率が低いことがわかった。

(4) 調査の成果 ア) イ)

ア) しかしながら、前回調査の結果報告のなかでも述べたとおり、それら正答率の数値に愕然とした半面、採点作業をとおして、学生たちの英語基礎力を向上させる余地が、まだ十二分に残っていることを再認識することもできた。つまり、不正答の解答のなかには、単語、文法ともに、次の解答例のように、正答に近いものが少なからず含まれていたのである。⁽⁵⁾

◇1月(January) → Janualy

◇キッチン(kitchen) → kitchin

◇人気のある(popular) → populer

◇catch の過去(分詞)形(caught) → cought

◇ride の過去分詞形(ridden) → riden

◇The boy invited the girl to the party. を受動態の肯定文に(④)の①: The girl was invited to the party by the boy.)

→The girl is invited to the party by the boy.

→The girl was invited the boy to the party.

このように、ケアレスミスとも言うべき「惜しい不正答」を「潜在的正答」とみなせば、正答率は大幅に上昇するとの推測が可能となった。また、文法に関する調査項目に未記入の調査用紙(答案)が目立ったのも特徴の一つであったが、この現象もまた、必ずしも悲観する必要がないことが筆者にはみてとれた。つまり、調査後におこなった調査対象者とのインタビューのなかで、一部の学生は「そんな文法事項は知りませんでした」とか「そういう質問だったのですね。それなら知っていました」と回答した。前者に当該文法事項の説明を一から施してやると、意外にもすんなりと理解してくれることがわかったし、中学生当時の彼らの頭脳(理解力)と大学生となった調査当時の頭脳(理解力)には、

同一人物であっても大きな違い(成長)があるのかもしれないことに気がついた。同時に、本学の初年次英語教育では、まさしく、基礎レベル(中学レベル)の内容を「再教育」することが肝要であることが当時の調査で明らかになった。

イ)当時の調査の成果はそれだけにとどまらない。本学は平成15年(2003年)8月に九州国際大学大学改革特別委員会の下部組織として「英語カリキュラム改革委員会」が設置され、筆者はその委員会の委員長を委託された。そこでは英語科目週2回開講制・習熟度別クラス編成(4レベルに区分)・一部英語科目の少人数クラス制などの教育システム改善をおこなった。これらの改革案のベースとなったのが、平成12年に実施した調査であった。また、個人的には、平成14年4月に『英語運用能力の養成』(青山社)を刊行し、本学の英語関連科目のテキストとして使用した。このテキストの作成のベースとなったのも同調査である。さらに、筆者は本学教授細木由紀子氏(当時准教授)と共同で、平成21年2月、「英語Ⅰ」の共通テキストとして『英語学習の基礎知識—28のStep』を開発した。このテキストの作成のベースとなったのも同調査である。

IV. 平成30年調査の結果と考察

(1)調査対象者

平成30年調査の調査対象者100名の所属・学年・人数・調査実施日・時限の内訳は以下のとおりである。

◇「英語Ⅱ」(普通クラスA教員担当)28名(12月4日4時間目調査実施)

※法学部・現代ビジネス学部1年生の混合クラス

◇「英語Ⅱ」(普通クラスB教員担当)30名(12月11日4時間目調査実施)

※法学部・現代ビジネス学部1年生の混合クラス

◇「英語Ⅱ」(普通クラスC教員担当)30名(12月18日4時間目調査実施)

※法学部・現代ビジネス学部1年生の混合クラス

◇「Reading II」(筆者担当) 5名(平成31年1月7日2時間目調査実施)

※現代ビジネス学部2年次生

◇「専門演習II」(筆者担当) 7名(平成31年1月8日3時間目調査実施)

※現代ビジネス学部2年次生

(2)調査内容

調査内容は、平成12年に実施したものと同一である。本調査の目的は本稿第Ⅱ節(「調査の目的」)に掲げた三点であり、前回調査と今回調査の単なる比較ではない。ただ、今回の調査結果を今後有効に活用する機会が訪れるとすれば、今回の調査内容を前回調査同様に設定するのが得策と考えた。調査用紙は資料(補遺)として本稿末尾に掲げている。参照されたい。

(3)調査結果の考察

以下に調査結果を、ア)文法編、イ)単語編に二分し項目毎に考察をおこなう。なお、正答率の()内の数値は平成12年調査の際の数値であるが、今回の調査の目的は前回調査との比較ではないために、考察に際しては、必要がない限り、前回調査の数値との比較対照という観点はとらない。

ア)調査結果(文法編)

① 文型

1. 5文型を決定する主要な4つの要素は、次の①～⑤の組合せのうちどれですか。該当するものの番号を一つだけ丸で囲みなさい。(※5者択一形式。選択肢の内容については、本稿末尾の資料参照。正答③)

◇正答率=84%(74%)※括弧内の数値は平成12年調査時の正答率(以下同)

2. 一般的に文型の種類が5通りであると説明されるのは、次の①～⑤のどの理由によるものですか。正しい説明文の番号を一つだけ丸で囲みなさい。

(※ 5 者択一形式。選択肢の内容については、本稿末尾の資料参照。正答②)
正答率=17% (12%)

3. 次の①～⑩の英文を読んで、該当する文型(1～5)を文尾の()内に記入しなさい。なお、①～⑩には、第1文型～第5文型に該当する英文が、それぞれ2文ずつ含まれています。(※①～⑩の英文については、本稿末尾の資料参照。)

◇①～⑩の正答率

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| ① [正答：第2文型] 28% (35%) | ② [正答：第5文型] 14% (11%) |
| ③ [正答：第3文型] 17% (27%) | ④ [正答：第1文型] 13% (11%) |
| ⑤ [正答：第1文型] 20% (16%) | ⑥ [正答：第4文型] 24% (22%) |
| ⑦ [正答：第2文型] 20% (18%) | ⑧ [正答：第4文型] 23% (28%) |
| ⑨ [正答：第5文型] 32% (25%) | ⑩ [正答：第3文型] 18% (18%) |

◇全問(①～⑩)正答できた学生の割合 = 0 % (1 %)

◇9問正答できた学生の割合 = 0 % (0 %)

◇8問正答できた学生の割合 = 2 % (1 %)

◇7問正答できた学生の割合 = 1 % (1 %)

◇6問正答できた学生の割合 = 2 % (4 %)

◇5問正答できた学生の割合 = 4 % (6 %)

◇4問正答できた学生の割合 = 8 % (10%)

◇3問正答できた学生の割合 = 13% (11%)

◇2問正答できた学生の割合 = 30% (19%)

◇1問正答できた学生の割合 = 24% (24%)

◇全問正答できなかった学生の割合 = 16% (23%)

【考察】

文型(5文型)は文の骨格である。文型の構造が理解できていてこそ、ある程

度正確に英文を読んだり書いたりできる。この読み書きの基礎知識ともいうべき文型への理解は、その他の文法事項を理解する際にも不可欠である。

① 1～3は文型への理解度を測るものである。2・3の設問の正答率に比して、1の設問の正答率が高いのが特徴的である。これは、学生たちが中学や高校の英語の授業で主語・(述語)動詞・補語・目的語という語句に頻繁に触れてきたためであろう。だが、1の設問の正答率の高さが文型への理解の高さを示すものではないことは、2・3の設問の正答率をみれば明らかである。設問2の正答率は17%と低い。これは、目的語や補語といった文の主要素が動詞の性質との関係で学生に捉えられていない可能性が高いことを物語っている。設問3の正答率も同じく低い。たとえば、設問中の④・⑤の英文はともに第1文型である。④の正答率は13%、⑤の正答率は20%である。今回の調査では④と⑤をともに正答できた学生の割合を確認するまでには至っていないが、第1文型を正確に判別できる学生の割合は最大に見積もっても13%であり、実際には13%には達していないと思われる。同様にみていくと、第2文型から第5文型を正確に判別できた学生の割合は最大に見積もっても、第2文型20%、第3文型17%、第4文型23%、第5文型14%である。

この調査結果から、本学の学生には文型に関する指導が不可欠であることは明らかである。

② 不定詞

次の①～⑥の英文に施した下線部分が、名詞的用法の不定詞であればA、形容詞的用法の不定詞であればB、副詞的用法の不定詞であればCを文尾の()内に記入しなさい。(※①～⑥の英文については、本稿末尾の資料参照。)

◇①～⑥の正答率

- | | |
|----------------------|----------------------|
| ① [正答B] 正答率=31%(40%) | ② [正答C] 正答率=31%(27%) |
| ③ [正答A] 正答率=25%(30%) | ④ [正答C] 正答率=32%(34%) |
| ⑤ [正答B] 正答率=23%(29%) | ⑥ [正答A] 正答率=52%(51%) |

- ◇全問(①～⑥)正答できた学生の割合 = 1 % (3 %)
- ◇全問正答できなかった学生の割合 = 14 % (15 %)
- ◇③・⑥(名詞的用法)ともに正答できた学生の割合 = 13 % (18 %)
- ◇①・⑤(形容詞的用法)ともに正答できた学生の割合 = 10 % (11 %)
- ◇②・④(副詞的用法)ともに正答できた学生の割合 = 8 % (10 %)

【考察】

筆者の30余年に及ぶ指導経験から判断する限り、本学の学生の大半は不定詞の基本形が動詞に to を冠したものであるとの認識を持っているようである。また、この「to+動詞の原形」に、いわゆる名詞的用法・形容詞的用法・副詞的用法の基本的な3つの用法があることも多くの学生は知っている。しかし、不定詞のこれら3つの用法に「名詞的」・「形容詞的」・「副詞的」という語句が冠されていることの意味を実際には理解できていないために、不定詞を含んだ英文を正しく読んだり書いたりできる学生が少ないという印象は否めない。これは、おそらくは、名詞や形容詞や副詞が文のなかでどのような役割を担っているのかという認識が彼らに欠けているためであろう。②の設問は学生の不定詞そのものへの理解度を測ると同時に筆者のそうした印象を数値で確認する目的で設定した。不定詞を含む①～⑥の英文は、③と⑥が名詞的用法、①と⑤が形容詞的用法、②と④が副詞的用法であるが、各正答率は順に13%、10%、8%と低い。

この調査結果から、本学の学生に不定詞の再指導が必要であることは明らかである。その場合、たとえば、名詞的用法の不定詞の指導に際しては、英文のなかで名詞が担っている役割が主として主語、補語、目的語であることをしっかりと学生に認識させる必要がある。形容詞、副詞の文中の役割についても同様の指導が必要であろう。

③ 現在完了形

次の英文を①～③の指示にしたがって書き換えなさい。

He lives here.

①文尾に“for ten years”を付け加えた英文に。

(※設問のねらい：指示により、時制の転換に気がつき、現在完了形の肯定文が正しく作文できるかどうか。)

正答率=25%(17%)

②“How many years～”で始まる英文に。

(※設問のねらい：指示により、時制の転換に気がつき、現在完了形の疑問文が正しく作文できるかどうか。)

正答率=10%(0%)

③「彼は以前(before)ここに住んだことはありません。」という英文に。

(※設問のねらい：示された和文が経験を伝える内容であることに気がつき、現在完了形の否定文が正しく作文できるかどうか。)

正答率=17%(7%)

◇全問(①～③)正答できた学生の割合 = 8%(0%)

◇2問(①および③)正答できた学生の割合 = 5%(5%)

◇1問(①または③)正答できた学生の割合 = 8%(14%)

◇全問正答できなかった学生の割合 = 69%(81%)

【考察】

③は現在完了形に関する学生の理解度を測るものである。①～③の設問のねらいは上記のとおりである。各設問の正答率は前回調査より改善してはいるものの、順に25%、10%、17%と低い。英語に比して、日本語の場合、「時」(時制)に関する厳密な使い分けは不要なことが多い。「彼はここに住んでいる」も「彼はここに10年間住んでいる」も、いずれも「住んでいる」という同一の表現で支障を来すことはない。もちろん、英語の場合、少なくとも作文上は

“lives” と “has lived” の使い分けが必要になる。①～③の正答率の低さはこうした日英語間の「時」(時制)に対する差異が影響していると考えられる。

ただし、学生に現在完了形の用法やその作文要領を理解させる際重要なのは、単に現在完了形に限定することなく、現在形・過去形・未来形の基本3時制をはじめ、進行相、完了進行相などとの比較において現在完了形が表す「時のイメージ」を理解させることであろう。

④ 受動態

次の英文を①～④の指示にしたがって書き換えなさい。

The boy invited the girl to the party.

①受動態の肯定文に。 正答率=16%(11%)

②受動態の否定文に。 正答率=15%(10%)

③受動態の疑問文に。 正答率=15%(9%)

④③の受動態の疑問文に対する “Yes” の返答文。 正答率=17%(13%)

◇全問(①～④)正答できた学生の割合=13%(5%)

◇3問正答できた学生の割合 = 2%(5%)

◇2問正答できた学生の割合 = 1%(2%)

◇1問正答できた学生の割合 = 4%(8%)

◇全問正答できなかった学生の割合 =80%(81%)

【考察】

一般的に「能動文が行為を行う側に視点が置かれている表現であるのに対して、受動文は行為を受ける側に視点を置いた表現である」^⑥と説明される。「する」「される」の能動受動の意味関係は何ら難しい概念ではなく、英語の能動文・受動文の相互の書き換え要領も比較的単純ですらある。

本調査項目①～④の正答率はいずれも15%前後にとどまっている。不正答の解答例としては、(1)無記入、(2)the boy をそのまま主語にしている、(3)the boy

と the girl の位置を入れ替えただけ、(4)be 動詞(was)が正しく選択されていないなどであった。(1)・(2)の解答例は、能動文・受動文の関係、概念もしくは書き換え要領が全く理解できていないこと、また(3)・(4)の解答例は、それらを「うっすらと」覚えている程度であることを示していると推測できる。上記のとおり、英語の能動文・受動文の相互の書き換え要領は平易なので、相互の書き換え練習を短時間で集中的に学習させることにより、能動態・受動態の単元(文法項目)を理解させることが必要であろう。

⑤ 関係代名詞

次の各組の英文(①～⑥)を、関係代名詞を用いて1文にしろ。(※①～⑥の英文については、本稿末尾の資料参照。)

- ①(※主格の who [付け足し型]) 正答率=45%(39%)
- ②(※主格の who [割り込み型]) 正答率=9%(8%)
- ③(※主格の which/that [付け足し型]) 正答率=36%(23%)
- ④(※主格の which/that [割り込み型]) 正答率=12%(7%)
- ⑤(※目的格の which/that [付け足し型]) 正答率=13%(7%)
- ⑥(※目的格の which/that [割り込み型]) 正答率=5%(3%)

◇全問(①～⑥)正答できた学生の割合=3%(1%)

◇5問正答できた学生の割合=3%(0%)

◇4問正答できた学生の割合=2%(3%)

◇3問正答できた学生の割合=7%(8%)

◇2問正答できた学生の割合=20%(12%)

◇1問正答できた学生の割合=18%(21%)

◇全問正答できなかった学生の割合=47%(55%)

【考察】

関係代名詞は文中の名詞を修飾、限定もしくは補足説明する形容詞節を導く

接続詞的な役割を担っている。名詞は主語・補語・目的語など、文のさまざまな要素として用いられる品詞なので、そのぶん、関係代名詞の使用頻度は高い。

さて、調査では全問(①～⑥)正答できなかった学生の割合が47%と、全体のほぼ5割であった一方、設問①の正答率が5割近くに達していることから、本学の学生の約半数は関係代名詞を「ある程度」理解できているものと思われる。「ある程度」と観るのは「付け足し型」の作文知識を問う設問①・③・⑤の正答率に対して、「割り込み型」の作文知識を問う②・④・⑥の正答率が大幅に下回っており、関係代名詞を含む作文要領を完全に理解しているとは言い難いからである。

この調査結果から、約5割の学生に使用頻度の高いこの関係代名詞について一から指導が必要であること、また、関係代名詞を「ある程度」理解できている約5割の学生には、すでに理解済みの「付け足し型」の知識を活用しながら「割り込み型」の作文要領に慣れ親しませることが必要である。

⑥ その他

1. 命令文

次の①～④の英文を命令文に書き換えなさい。(※①～④の英文については、本稿末尾の資料参照。)

- ①(※設問のねらい：一般動詞を用いる肯定形の命令文への理解度を測る。)

正答率=23%(17%)

- ②(※設問のねらい：be 動詞を用いる肯定形の命令文への理解度を測る。)

正答率=22%(18%)

- ③(※設問のねらい：please を冠する命令文への理解度を測る。)

正答率=1%(4%)

- ④(※設問のねらい：否定の命令文への理解度を測る。) 正答率=19%(17%)

◇全問(①～④)正答できた学生の割合 = 0%(2%)

◇3問正答できた学生の割合 = 11%(※前回データなし)

◇2問正答できた学生の割合 = 11%(※前回データなし)

◇1問正答できた学生の割合 = 10%(※前回データなし)

◇全問正答できなかった学生の割合 = 68%(70%)

【考察】

Sit down, please.や Don't smoke here.などの英文が命令文であることは大半の学生が理解できているであろう。本調査項目では設問文中に「命令文に書き換えなさい」と明記されているわけなので、Sit down, please.や Don't smoke here.に倣って① Leave now. ④ Don't swim here.と書き表すだけのことであるし、②には一般動詞が含まれていないので、その点のみに注意して Be で始める英文を作るだけのことである。①②④の正答率が20%前後であることから、全体の約2割の学生は命令文の基本が理解できていると言えよう。しかし、命令文の作文要領は他の文法項目に比して、それほど難解なものではないことを考えれば、この正答率は低いと観ざるをえない。③については、与えられた英文が Will you ではじまる依頼文であるために、please を含めた英文(解答)を求めた問いである。①②④より難易度は高いが正答率1%(正答者1名)はやはり低すぎると言わざるをえない。命令文については、You must + 動詞の原形→動詞の原形(命令文)、You must not + 動詞の原形→Don't + 動詞の原形(命令文)、Will you...? →通常の命令文の前か後ろに please を付す(命令文)というような、助動詞との関連性についても徹底した指導が必要である。

2. 分詞の形容詞的用法

文意をよく考えたうえで、次の①～④の英文の()内の動詞を適切な形に変え、文尾の()内に記入しなさい。(※①～④の英文については、本稿末尾の資料参照。)

①正答率=35%(34%)

②正答率=63%(50%)

③正答率=55%(46%)

④正答率=53%(42%)

- ◇全問(①～④)正答できた学生の割合 = 20% (11%)
- ◇3問正答できた学生の割合 = 25% (※前回データなし)
- ◇2問正答できた学生の割合 = 18% (※前回データなし)
- ◇1問正答できた学生の割合 = 17% (※前回データなし)
- ◇全問正答できなかった学生の割合 = 20% (20%)

【考察】

本調査項目は、分詞(現在分詞・過去分詞)を形容詞として用いることができるかどうかを問うものである。設問文中に「()内の動詞を適切な形に変え」というフレーズが含まれているのでそれがヒントになったのであろうか、未解答(無記入)以外のほとんどは現在分詞か過去分詞に書き換えられていた。①～④の正答率が概ね50%前後であるということは、約半数の学生が現在分詞に「～している」、過去分詞に「～された」というニュアンスが伴っていることを理解できていることの表われであると見なすことができよう。

3. 単文／重文／複文

次の①～⑥の英文を読んで、単文であればA、重文であればB、複文であればCを文尾の()内に記入しなさい。(※①～⑥の英文については、本稿末尾の資料参照。)

- ①正答率=69% (52%) ②正答率=35% (36%) ③正答率=37% (37%)
- ④正答率=26% (30%) ⑤正答率=31% (33%) ⑥正答率=47% (44%)
- ◇全問(①～⑥)正答できた学生の割合 = 5% (2%)
- ◇5問正答できた学生の割合 = 7% (※前回データなし)
- ◇4問正答できた学生の割合 = 18% (※前回データなし)
- ◇3問正答できた学生の割合 = 17% (※前回データなし)
- ◇2問正答できた学生の割合 = 24% (※前回データなし)
- ◇1問正答できた学生の割合 = 13% (※前回データなし)

◇①⑥(単文)とも正答できた学生の割合=41%(※前回データなし)

◇②③(重文)とも正答できた学生の割合=18%(※前回データなし)

◇④⑤(複文)とも正答できた学生の割合=6%(※前回データなし)

◇全問正答できなかった学生の割合 =16%(14%)

【考察】

単文・重文・複文は、一文中の節(S-V)の数と節同士の関係という観点からみた文の分類である。重文と複文の区別は、接続詞の種類(等位接続詞・従位接続詞)の区別がつきさえすれば、容易に判断できる。しかし、単文・重文・複文の区別がつくこと自体にはさして大きな意味はなく、英文パラグラフや英文エッセイを作成するような場合に、文の展開が単調にならないよう、単文・重文・複文をたとえば次のように書き分ける工夫が必要であることを理解することが大切であろう。

- ・ He was very tired.(単文) However, he kept working.(単文)
- ・ Being very tired, he kept working.(単文)
- ・ He was very tired, but he kept working.(重文)
- ・ Although he was very tired, he kept working.(複文)

本調査の正答率は英文(①～⑥)によって差がある。①と⑥(単文)の正答率が②と③(重文)や④と⑤(複文)に比して高いのは、おそらく①と⑥の文中に節が一つであることを学生が見抜いて単文であると判断したためであろう。また、②と③および④と⑤の正答率が概ね同程度であることは、重文と複文の区別がついていないためであるかもしれない。このことは、①と⑥(単文)ともに正答できた学生の割合(41%)と②と③(重文)ともに正答できた学生の割合(18%)や④と⑤(複文)ともに正答できた学生の割合(6%)との差にも表われている。単文はもちろんのこと、重文・複文および接続詞(等位接続詞・従位接続詞)に

関して学生の理解を深めるような指導が求められる。

4. 形容詞および副詞の比較変化

次の①～⑤の単語の比較級形・最上級形を()内に綴りなさい。(※①～⑤の単語については、本稿末尾の資料参照。)

①正答率=53%(50%) ②正答率=39%(36%) ③正答率=56%(55%)

④正答率=36%(29%) ⑤正答率=49%(53%)

◇全問(①～⑤)正答できた学生の割合 =14%(13%)

◇4問正答できた学生の割合 =23%(※前回データなし)

◇3問正答できた学生の割合 =11%(※前回データなし)

◇2問正答できた学生の割合 =11%(※前回データなし)

◇1問正答できた学生の割合 =15%(※前回データなし)

◇全問正答できなかった学生の割合 =26%(19%)

【考察】

本調査項目では、形容詞や副詞を比較級形・最上級形に変化させる際に注意を要するケースをとりあげている。①と②は原形の語尾変化に注意を要するケース、③と④は独自の比較級形・最上級形を持つケース、⑤は原形が複音節の単語の変化のケースである。各設問の正答率は概ね4割から5割であるが、全問正答できた学生の割合(14%)と全問正答できなかった学生の割合(26%)に目を向けると、本調査項目に関する再指導も不可欠である。

イ) 調査結果(単語編)

① 紛らわしい綴りの単語

1月(January)	53%(37%)	2月(February)	27%(21%)
3月(March)	75%(59%)	4月(April)	73%(72%)
5月(May)	82%(73%)	6月(June)	63%(62%)

7月(July) 67%(70%) 8月(August) 59%(48%)

9月(September) 77%(54%) 10月(October) 63%(29%)

11月(November) 69%(33%) 12月(December) 70%(47%)

◇12ヶ月全てを正確に綴ることのできた学生の割合=11%(3%)

月曜(Monday) 92%(84%) 火曜(Tuesday) 75%(45%)

水曜(Wednesday) 69%(34%) 木曜(Thursday) 52%(26%)

金曜(Friday) 85%(77%) 土曜(Saturday) 64%(54%)

日曜(Sunday) 93%(92%)

◇全曜日を正確に綴ることのできた学生の割合=30%(14%)

ボート(boat) 51%(54%) 朝食(breakfast) 78%(68%) 大学(カレッジ college) 44%(43%) 色(color) 66%(50%) 娘(daughter) 29%

(26%) 辞書(dictionary) 47%(51%) 有名な(famous) 74%(60%)

おもしろい(interesting/funny) 67%(41%) キッチン(kitchen) 41%

(42%) 言語(language) 59%(25%) 果物(fruit[s]) 44%(26%) 図書館

(library) 60%(27%) (時間の)分(minute) 59%(32%) 山(moun-

tain) 76%(63%) 明日(tomorrow) 67%(61%) 村(village) 26%

(15%) 暖かい(warm) 42%(46%) 1,000(thousand) 27%(17%) ポ

ピュラーな(popular) 75%(53%)

【考察】

①では紛らわしい綴りの単語として1月～12月、月曜日～日曜日に加え19語を綴ってもらった。本調査の目的は、今回の調査結果を平成12年実施の前回調査結果と比較することではないが、「7月」「ボート」「辞書」「キッチン」「暖かい」の5語を除く全ての単語で、前回調査の正答率を上回っているのが特徴的である。この差の原因は不明であるが、単純に考えれば、今回の調査対象者が中学生時代に受けた単語の綴りの指導の方がより徹底していたであろうこと、また、彼らが小学5・6年生の頃には既に「外国語学習」が必須化(平

成23年)されており、そのために英語に接する期間が前回調査の対象者よりも長かったためであると推測できる。

また、文法項目に関する設問の正答率よりも上掲の単語の綴りの正答率の方が総じて高めなのは、文法が「理解力」を必要とするのに対して、単語は音や視覚的印象などの感覚的要素を伴うからであろう。また、紛らわしい綴りであるぶん、より注意深く覚えた経験があるためでもであろう。前回調査のときもそうであったが、不正答の中には Feburaly、Octorber、Fryday、kitchin、villige などケアレミスが散見できた。品詞の違いを問わず、基礎的日常的な英単語のなかには、このように誤って綴ってしまう英単語が数多く存在する。教員はそれらを一覧表にするなどして学生に注意を喚起すべきであろう。

②「格」の変化に関する単語の正答率

I の変化(my-me-mine) 76% (81%)

You の変化(your-you-yours) 60% (64%)

He の変化(his-him-his) 59% (56%)

She の変化(her-her-hers) 57% (62%)

We の変化(our-us-ours) 44% (26%)

They の変化(their-them-theirs) 25% (21%)

It の変化(its-it) 23% (29%)

◇「格」の変化を漏れなく正答できた学生の割合 = 9% (9%)

◇「格」の変化を正答できなかった学生の割合 = 20% (※前回データなし)

【考察】

多くの学生は人称代名詞の格の変化(主格→所有格→目的格→所有代名詞)を中学時代に繰り返し音読した(させられた)経験があるのでであろう。文法編の各設問の正答率に比して格の変化の正答率が高いのはそのためだと考えられる。不正答のなかには、(1)(He)his→him→his(正答)を(He)him→his→hisと順序

を間違えているもの、(2)hers、ours、theirs にアポストロフィーをつけるケース(her's、our's、their's)、(3)their を there と綴るケースが目立っている。これらのケアレスミスは教員側の指導次第で簡単に解消できる性質のものであろう。

③ 不規則変化動詞(55語)

◇55語各語の過去形・過去分詞形・現在分詞形の正答率(※各語末尾のボード体で示した数字は、過去形・過去分詞形・現在分詞形全てを正確に綴ることのできた学生の割合である。)

become	87%(89%)	44%(42%)	36%(44%)	23%(26%)
begin	75%(83%)	43%(48%)	15%(27%)	10%(18%)
break	66%(44%)	63%(46%)	21%(46%)	33%(25%)
bring	32%(17%)	31%(19%)	38%(38%)	16%(12%)
build	65%(43%)	61%(40%)	42%(43%)	28%(29%)
buy	81%(54%)	72%(51%)	39%(32%)	33%(24%)
catch	51%(37%)	45%(37%)	40%(49%)	18%(23%)
come	91%(93%)	51%(41%)	35%(36%)	24%(21%)
cut	73%(74%)	72%(72%)	39%(52%)	34%(43%)
draw	28%(44%)	22%(16%)	35%(49%)	5%(10%)
drink	40%(31%)	32%(25%)	40%(55%)	12%(20%)
drive	37%(33%)	26%(22%)	38%(51%)	9%(12%)
eat	74%(52%)	51%(43%)	37%(35%)	26%(18%)
feel	59%(37%)	58%(37%)	40%(50%)	30%(28%)
find	67%(55%)	64%(50%)	41%(51%)	34%(33%)
fly	16%(12%)	17%(6%)	31%(37%)	4%(4%)
forget ⁽⁷⁾	65%(60%)	59%(43%)	23%(36%)	17%(25%)
get ⁽⁸⁾	77%(75%)	56%(55%)	36%(50%)	26%(34%)

在学生の英語力実態調査および提言

give	83% (82%)	61% (54%)	42% (47%)	31% (32%)
go	77% (78%)	58% (39%)	42% (58%)	26% (30%)
grow	51% (61%)	48% (33%)	42% (48%)	19% (18%)
have	70% (72%)	49% (55%)	42% (51%)	26% (31%)
hear	38% (48%)	38% (45%)	37% (48%)	19% (30%)
keep	72% (69%)	73% (62%)	43% (54%)	31% (43%)
know	73% (79%)	60% (56%)	39% (48%)	29% (33%)
leave	59% (54%)	57% (51%)	41% (48%)	27% (34%)
lend	44% (40%)	41% (35%)	38% (45%)	21% (25%)
let	53% (47%)	53% (47%)	26% (34%)	19% (26%)
lose	53% (38%)	49% (34%)	36% (35%)	27% (22%)
make	75% (62%)	60% (47%)	40% (50%)	29% (32%)
mean	12% (13%)	12% (12%)	36% (41%)	8 % (11%)
meet	79% (61%)	74% (56%)	41% (52%)	36% (38%)
put	67% (65%)	68% (60%)	33% (49%)	27% (39%)
read	70% (61%)	67% (58%)	42% (51%)	33% (36%)
ride	35% (17%)	18% (4 %)	36% (37%)	8 % (1 %)
rise	29% (24%)	28% (18%)	36% (42%)	13% (10%)
run	53% (56%)	53% (49%)	39% (53%)	15% (29%)
say	60% (69%)	54% (61%)	37% (39%)	28% (30%)
see	75% (68%)	57% (53%)	41% (46%)	28% (31%)
sell	52% (20%)	45% (20%)	39% (48%)	25% (15%)
send	52% (43%)	48% (38%)	37% (44%)	20% (28%)
show ⁽⁹⁾	39% (44%)	49% (47%)	38% (51%)	20% (26%)
sing	43% (39%)	31% (36%)	41% (49%)	16% (21%)
sit	35% (41%)	27% (28%)	37% (51%)	13% (19%)
sleep	57% (52%)	54% (48%)	41% (57%)	24% (36%)

speak	59% (50%)	57% (51%)	40% (59%)	27% (36%)
spend	47% (40%)	40% (34%)	37% (47%)	22% (28%)
stand	38% (38%)	32% (34%)	39% (54%)	17% (28%)
swim	58% (54%)	21% (19%)	35% (51%)	7% (15%)
take	63% (52%)	67% (62%)	41% (53%)	33% (28%)
teach	34% (19%)	33% (17%)	39% (51%)	15% (14%)
tell	47% (31%)	44% (25%)	35% (45%)	23% (21%)
think	43% (31%)	41% (30%)	33% (52%)	16% (23%)
understand	62% (60%)	59% (49%)	32% (50%)	23% (35%)
write	70% (69%)	53% (47%)	25% (36%)	16% (21%)

◇全55動詞の過去形・過去分詞形・現在分詞形を正しく綴ることのできた
学生の割合 = 0% (0%)

◇現在分詞の欄が空欄になっていたり、“～ing”以外の形で記入した学生の
割合 = 55% (36%)

【考察】

調査対象としたのは、前回調査当時(平成12年)、中学の検定(済)教科書に出てくる55の不規則変化動詞である。これらの動詞は、規則変化動詞とは違って、独自の過去形・過去分詞形を持っているため、覚えようという姿勢と意欲がなければ身につかない。

今回調査した動詞の変化の正答率は動詞間で差が激しい。これは動詞の使用頻度や、原形→過去形→過去分詞形(→現在分詞形)と続けて音読したときの音の変化の心地良さや覚えやすさなどの差によるものと推測できる。たとえば、come、give、know、takeなどの基本動詞の使用頻度は高いぶん正答率も比較的高いし、buy(→bought→bought)・mean(→meant→meant)・meet(→met→met)・put(→put→put)・read(→read→read)などは、音の変化の心地良さや覚えやすさのために記憶に定着しやすい。それに対して、draw、fly、rise

などの使用頻度が比較的少なく、音の面では複雑に変化する動詞は、そのぶん正答率が低い傾向にある。

なお、現在分詞の欄が空欄になっていたり、“～ing” 以外の形で記入した学生の割合が半数以上であるのは、「現在分詞」が動詞の語尾を“～ing” で表記したものであるとの認識(知識)が欠けているためだと推測できる。

分詞(現在分詞・過去分詞)は形容詞としても用いられるほか、完了時制、進行時制、受動態で用いられるので、かりに完了時制、進行時制、受動態の作文要領を理解できていたとしても、動詞の不規則変化のパターンを知らなければ、(辞書で確認しない限り)作文は完成しない。基礎レベルの不規則変化動詞の数は僅か55語なので学生には②の格の変化表同様、確実に綴りかつ発音できるよう指導が必要である。

V. 提言

今回の調査(平成30年度調査)の結果と考察は以上のとおりである。本調査の目的は、まず筆者が日頃から「なんとなく」理解しているつもりでいる学生たちの英語力の実態を知ることであった。次いでその実態調査を材料として新旧両英語教員間で「英語Ⅰ」・「英語Ⅱ」に関するさまざまな議論を活性化する機運を高めるためであった。そして最後に調査結果に基づいて筆者がイメージしている「英語Ⅰ」での教育内容および教育方法を提言するためであった。前節で俯瞰したとおり、本調査では本学の平均的な英語力の学生には中学レベルの英語力が十分に身につけているとは言い難いという現実が明らかになった。よって以下では「英語Ⅰ」における教育内容および教育方法についての提案内容をまとめる。

(1)「英語Ⅰ」の位置づけ

基礎的英語力(中学レベル)を再教育する。具体的には中学レベルの英文法

を中心に据えた授業展開を図る。

(2)習熟度別クラス編成

基礎学力テストの結果(成績)に基づいて、現状どおり習熟度に応じてクラスを4レベル程度に分ける。なお、基礎学力テストは、TOEIC Bridge などのように総合的な英語力を測るものではなく、本調査で試みたような中学の英文法の主要な単元(文法項目)を網羅したものを独自に作成する。個別の学生がどの文法項目を理解し理解していないか、また、どの程度理解できているかの確認ができるような形式のテスト内容にする。

(3)基礎学力テストの結果の授業への活用

上記のような基礎学力テストによって、どの学生がどの文法事項を理解し理解していないか、また、どの程度理解できているかなどが把握できるため、基礎学力テストの結果は、単に習熟度別クラス編成作業の基礎資料であるだけでなく、教員にとっては指導上の貴重な資料となり、学生自身にとっては自らの弱点を客観的に把握するものとしての意味を持つ。したがって、基礎学力テストの結果を授業へ活用することにより、より良い教育効果を期待できる。具体的には、筆者は次のような授業イメージを抱いている。

①基礎学力テストの結果に基づき、学生に学習計画表を作成させる。たとえば、理解度(基礎学力テストの正答率)を参考にして再学習すべき単元(文法事項)に序列をつけさせる。正答率の高低どちらを優先して学習するかどうかは学生に判断させる。この作業を30回の授業の最初の2～3回ほどでおこなわせたいので、担当教員は作業結果を学生と共有する。

②①の作業が終わったら、以後の授業では「学習計画表」にしたがい各自で(4)の副教材を参考にしながら学習させる。つまり、教員は一斉授業をおこ

なうのではなく、学生の質問に答えたり、学習の進め方をアドバイスしたりするチューター的な役割に徹する。毎回の授業で学生に「学習内容と成果」^⑨を書いてもらい、教員が管理する。

- ③教員は学期回数回にわたり、授業時間やオフィスパワーを使って学生と個別面談し当該学生の「学習計画表」と「学習内容と成果」^⑩に基づき、学習済み単元(文法項目)の理解度を何らかの形で(たとえば単元別小テストなどで)確認する。

(4)共通テキストまたは共通参考書の副教材としての使用

上記(3)のとおり、毎回の授業は学生の自習により進められるので、学生が常に参照できるような共通テキストまたは共通参考書を副教材として指定する。

VI. おわりに

本学の在学生100名を対象とした英語力実態調査の結果、本学の平均的な学生には中学レベルの英語力が十分に身につけていないことが判明した。その理由はともかくとして、肝心なのは、だからこそ、1年次春学期開講の「英語Ⅰ」をとおしてわれわれ教員が彼らに基礎レベルの英語を再学習する機会を与えることである。

外国語の技能は、一斉授業のような方法で身につくものではない。学生自らが主体的に取り組む姿勢をもってこそ、技能は身につくものであろう。幸い、中学時代の彼らの頭脳はさまざまな学習や体験を経ることで成長を続けている。中学時代に理解できなかったことの多くは、大学生になった現在、理解可能な内容のものであろう。学生自らが主体的に学習に取り組む環境づくりの義務と責任を担うのが教員であることは言うまでもない。

資料(補遺)

【調査用紙】

氏名		所属学科	法・地域経済・国際社会
----	--	------	-------------

【文法編：Grammar】

1. 5 文型を決定する主要な 4 つの要素は、次の①～⑤の組合せのうちどれですか。該当するものの番号を一つだけ丸で囲みなさい。(Choose the correct combination that organizes five sentence patterns. Circle the number of the correct combination.)

- ① 主語(subject)・述語動詞(verb)・助動詞(auxiliary verb)・修飾語(modifier)
- ② 主語(s)・述語動詞(v)・助動詞(auxiliary verb)・準動詞(verbal)
- ③ 主語(s)・述語動詞(v)・目的語(object)・補語(complement)
- ④ 主語(s)・述語動詞(v)・不定詞(infinitive)・動名詞(gerund)
- ⑤ 主語(s)・述語動詞(v)・疑問詞(interrogative)・代名詞(pronoun)

2. 一般的に文型の種類が 5 通りであると説明されるのは、次の①～⑤のどの理由によるものですか。正しい説明文の番号を一つだけ丸で囲みなさい。(Choose the correct definition that explains why there are five English sentence patterns.)

- ① 文の種類は、肯定文・否定文・疑問文・命令文・感嘆文の 5 通りに分類できるから。(because English sentences are classified into affirmative, negative, interrogative, imperative, and exclamatory sentences.)
- ② 動詞の性質は、5 通りに分類できるから。(because there are five types of verbs.)
- ③ 名詞の種類は、普通名詞・固有名詞・集合名詞・物質名詞・抽象名詞の 5 通りに分類できるから。(because English nouns are classified into common, proper, collective, material, and abstract nouns.)
- ④ 文の時制は、現在形・過去形・未来形・完了形・進行形の 5 通りに分類できるから。(because English tenses are classified into present, past, future, present perfect, and progressive forms.)
- ⑤ 動詞の種類は、be 動詞・一般動詞・規則変化動詞・不規則変化動詞・知覚動詞の 5 通りに分類できるから。(because verbs are classified into be-verb, general-verb, regular verb, irregular verb, and sensory verbs.)

3. 次の①～⑩の英文を読んで、該当する文型(1～5)を文尾の()内に記入しなさい。なお、①～⑩には、第 1 文型～第 5 文型に該当する英文が、それぞれ 2 文ずつ含まれています。(Read the following sentences and write 1,2,3,4,or5 in the parenthesis according to the sentence pattern.)

- ① You look so happy today.()
- ② We call the dog Taro. ()
- ③ I don't know how to get there. ()
- ④ We will go to the beach after school. ()
- ⑤ Can you run faster than Taro? ()

- ⑥ Will you show Taro the way to the station? ()
- ⑦ This is a very interesting book for children. ()
- ⑧ I will give Taro this racket. ()
- ⑨ She always keeps her room clean. ()
- ⑩ I want to speak good English. ()

2 次の①～⑥の英文に施した下線部分が、名詞的用法の不定詞であればA、形容詞的用法の不定詞であればB、副詞的用法の不定詞であればCを文尾の()内に記入しなさい。
(Write A in the parenthesis if the underlined phrase functions as noun; B if it does as adjective; and C if it does as adverb.)

- ① He didn't give Taro a book to read on the train. ()
- ② I was at the airport to meet Taro's uncle. ()
- ③ I want to be an English teacher in the future. ()
- ④ I'm very happy to meet you. ()
- ⑤ We have many things to do today. ()
- ⑥ To play tennis is very fun. ()

3 次の英文を①～③の指示にしたがって書き換えなさい(全文を記すこと: Rewrite the following sentence as is requested.)。

He lives here.

- ① 文尾に“for ten years”を付け加えた英文に。(Add “for ten years”).

_____ for ten years.

- ② “How many years～”で始まる英文に。(Begin with “How many years～”).

How many years _____ ?

- ③ 「彼は以前 (before) ここに住んだことはありません。」という英文に。(Change it into negative sentence including “before” at the end of the sentence.)

_____ before.

4 次の英文を①～④の指示にしたがって書き換えなさい(全文を記すこと)。

The boy invited the girl to the party.

- ① 受動態の肯定文に(passive: affirmative)。

_____.

- ② 受動態の否定文に(passive: negative)。

_____.

- ③ 受動態の疑問文に(passive: interrogative)。

_____?

- ④ ③の受動態の疑問文に対する“Yes”の返答文(reply sentence of ③ beginning with “Yes”).

Yes, _____.

- 5 次の各組の英文 (①～⑥) を関係代名詞を用いて 1 文に下さい。(Connect two sentences using the appropriate relative pronoun.)

① I know the man. He is taking pictures.

_____ .

② The man is Taro's father. He is taking pictures.

_____ .

③ Do you know the train? It can run the fastest.

_____ ?

④ The train is Shinkansen. It can run the fastest.

_____ .

⑤ This is the car. I want the car.

_____ .

⑥ The car is expensive. I want the car.

_____ .

- 6 1. 次の①～④の英文を命令文に書き換えなさい。(Write the following sentences in the form of imperative sentence.)

① You must leave now.

_____ .

② You must be kind to younger people.

_____ .

③ Will you give Taro the book?

_____ .

④ You must not swim here.

_____ .

2. 文意をよく考えたうえで、①～④の英文の()内の動詞を適切な形に変え、文尾の()内に記入しなさい。(Change the word in the parenthesis in the appropriate form.)

① Look at the (paint) wall. ()

② Do you know the girl (talk) to the boy? ()

③ The (smile) woman is Taro's mother. ()

④ The dish (cook) for Taro was very nice. ()

3. 次の英文①～⑥を読んで、単文であればA、重文であればB、複文であればCを文尾の()内に記入しなさい。(Write A in the parenthesis if the sentence is a simple sentence, write B if the sentence is a compound sentence, and write C if the sentence is a complex sentence.)

① Next week I will go to the department store to buy a new camera. ()

② Next week I will go to the department store, and I will buy a new camera. ()

③ He was hungry, but he didn't have anything to eat. ()

- ④ He couldn't understand the word because he was too young. ()
 ⑤ When he was young, he worked hard. ()
 ⑥ I want Taro and Goro to go to the supermarket with Midori. ()

4. 次の①～⑤の単語の比較級形・最上級形を()内に綴りなさい。(Spell the comparative and superlative of the following adjectives.)

- ① hot ()(<)
 ② early()(<)
 ③ good ()(<)
 ④ well ()(<)
 ⑤ beautiful()(<)

【単語編 : Spelling of Words】

1 次の語句を英単語で綴りなさい。(Spell the following Japanese words in English.)

1 月 _____ 2 月 _____ 3 月 _____
 4 月 _____ 5 月 _____ 6 月 _____
 7 月 _____ 8 月 _____ 9 月 _____
 10 月 _____ 11 月 _____ 12 月 _____
 月曜日 _____ 火曜日 _____ 水曜日 _____
 木曜日 _____ 金曜日 _____ 土曜日 _____
 日曜日 _____ ボート _____ 朝食 _____
 大学 (カレッジ) _____ 色 _____ 娘 _____
 辞書 _____ 有名な _____ おもしろい _____
 キッチン _____ 言語 _____ 果物 _____
 図書館 _____ (時間の) 分 _____ 山 _____
 明日 _____ 村 _____ 暖かい _____
 1,000 _____ ポピュラーな _____

2 下の格の変化表を完成させなさい。(Complete the following list.)

主格 subjective case	所有格 possessive case	目的格 objective case	所有代名詞 possessive pronoun
I			
You			
He			
She			
We			
They			
It			

3 次の不規則変化動詞の過去形・過去分詞形・現在分詞形を綴りなさい。(Spell the past form, the past participle form, and the present participle form of each irregular verb.)

原形 original form	過去形 past form	過去分詞 past participle	現在分詞 present participle
become			
begin			
break			
bring			
build			
buy			
catch			
come			
cut			
draw			
drink			
drive			
eat			
feel			
find			
fly			
forget			
get			
give			
go			
grow			
have			
hear			
keep			
know			
leave			
lend			
let			
lose			
make			
mean			
meet			
put			
read			

ride			
rise			
run			
say			
see			
sell			
send			
show			
sing			
sit			
sleep			
speak			
spend			
stand			
swim			
take			
teach			
tell			
think			
understand			
write			

注

- (1) 文部省(現、文部科学省)の調査では、国公立587大学(当時)のうち、全体の約13%に相当する78の大学が何らかの形で高校の教科の内容を教える「補習授業」を実施していると報告されている(1999年8月1日 読売新聞朝刊)。また、民間の調査によると、短大・大学の約3割が理数系科目の「補習授業」を実施している(1999年8月21日 同)。
- (2) 調査結果については、大園 弘「本学在学生の英語力の実態と英語力低下問題への対策試案」(九州国際大学社会文化研究所『紀要』第46号 2000年7月) pp. 145-172を参照されたい。
- (3) 「高等教育の将来構想に関する基礎データ」(文科省)によると、筆者が前回調査を実施した平成12年(2000年)の18歳人口は151万人、平成20年(2008年)は124万人、平成29年(2017年)は120万人と報告されている。

www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/gijiroku/...(2018年1月23日閲覧)

- (4) 学習指導要領は、調査当時に筆者が入手できた『中学校指導要領 外国語編』（平成元年度版）を用いた。同要領によると、中学3年間で学ぶ新語の数は1,000語程度、うち必須語は507語である。ちなみに、「中学校・外国語学習指導要領新旧対照表」によると平成20年(2008年)の学習指導要領に示された新語は1,200語、平成29年(2017年)の新学習指導要領に示された新語は、小学校で学習した語に1600～1800語程度の新語を加えた語、とされている。<https://tb.sanseido-publ.co.jp/wp-sanseido/wp-content/...>(2018年1月23日閲覧)
- (5) 大園 弘、前掲報告書、pp. 157-158参照。
- (6) 中村捷『実例開設英文法』開拓社、2009年、269頁。
- (7) forget の過去分詞は forgot, forgotten とともに正答として合算している。
- (8) get の過去分詞は got, gotten とともに正答として合算している。
- (9) show の過去分詞は showed, shown とともに正答として合算している。
- (10) 「学習計画表」と「学習内容と成果」のフォーマットは未作成である。

謝辞

本調査の実施にあたり、本学非常勤講師の岡山智英子先生(本文でA教員と表記)、泉澤みゆき先生(同B教員)、名嶋律子先生(同C教員)および、これらの先生方の「英語Ⅱ」(普通クラス)を受講する本学の計88名の1年次生、筆者の「ReadingⅡ」、「専門演習Ⅱ」を受講する計12名の現代ビジネス学部国際社会学科の2年次生に対し謝意を表したい。各先生方および総計100名にのぼる本学の学生たちには本調査の趣旨をご理解いただき調査にご協力をいただいた。

